平成２５年度「重点研究費」研究成果報告書

研究課題	読書活動を促進する経験と行動は何か？ ―第 58 回学校読書調査の分析結果より―

研究代表者

氏名	所属	職名
腰越　滋	教育学部 教育学講座	准教授

研究分担者

氏名	所属	職名

【研究成果の概要】　（文字の大きさ 9 ポイント・字数 800 字～1600 字程度）

本研究は、公益社団法人･全国ＳＬＡ(学校図書館協議会)が毎日新聞社の協力を得て毎年実施している｢学校読書調査｣の第 58 回調査の分析結果を基に、子どもの読書活動を促進する経験にはどのようなものがあり、そしてその活動がどのような行動に結びついていくかの関係性について、図式的に実証することを目的として進められた。成果の概要としては、以下に示される通りである。

公益社団法人･全国学校図書館協議会（ School Library Association ：略称、全国 SLA ）と毎日新聞社が共同で実施してきた｢学校読書調査｣の第 58 回データ(平成 24 年実施)を使用し、方法として構造方程式モデリング（ SEM； Structural Equation Modeling ）を援用する。このことにより、読書冊数に影響を及ぼす活動を図式化することに成功した。

図式の分析結果から得られた知見およびそこから得られた推論を概略まとめると、以下の 7 点に整理できる。

①「読書冊数」を規定するのは、「本への関心」や「図書館利用頻度」から成る「向読書行動」であり、「向読書行動」形成には、「読書にまつわる経験」が効いている。さらに、「読書にまつわる経験」は、「関心ある本へのアクセス」、「読了後の本を巡る向読書行動」、「本を媒介とした友人との交流」などから形成される。

②「読書にまつわる経験」から「向読書行動」へのパス係数値の小中学生の違いから、読書経験が読書行動に結びつくことが読み取れる。但し高校生では、行動が多様化するせいか、読書経験が即読書行動に結びついていない。

③「向読書行動」から「読書数」へのパス係数値は、小学生から中学生にかけて値が下がり、高校生で再び上向く。ここから、年齢と共に読まない生徒と読む生徒の間の二極分化現象が生起していることが示唆される。

④「向読書行動」から「本への関心」に向けてのパス係数値は、小学生よりも中・高校生の方が高い。ここからは、親から独立した行動の範囲が広がる中・高校生の方が、本への関心を行動に体現しやすくなると推察される。

⑤「向読書行動」から「図書館利用頻度」に向けてのパス係数値の違いからは、小学校で図書館に行けていた子どもが、中学生になるとパッタリと行けなくなることが示された。図書館利用度をどう高めるのかが、不読現象の緩和に影響を及ぼすと言える。

⑥「読書にまつわる経験」から「関心ある本へのアクセス」に向けてのパス係数値は、長じるにしたがって値が上がる。個人の嗜好性の分化と共に、読書での経験則が、「関心のある本へと生徒たちをいざなうことを示唆する。

⑦「読書にまつわる経験」から「読了後の本を巡る向読書行動」に向けてのパス係数値からは、小学生で経験できていたことが、中学生・高校生では経験できていないということが示唆される。授業での経験機会が、小学校よりも中学・高校で相対的に少なくなる現状の現れと推察できる。

上記の知見に加え、より斬新な findings を得るための今後の課題としては、以下の２点が挙げられる。

ｉ．教諭（含む司書教諭）の先生方や学校司書の経験や実践知を尊重しながら、読書を促進する活動を詳細に把握するための変数作りに、更なる工夫と改善を行うこと。

ⅱ．ＳＥＭのアウトプットから、適合度指標を上げるための観測変数としては何が好適かについて、考究を継続していくこと。

研究成果発表方法

［発表論文名（口頭発表を含む），氏名，学会誌等名（投稿中・投稿予定・執筆中）を記入する。］

※本経費を用いて、報告書（冊子等）を作成した場合には、本様式とともに1部を提出すること。
なお、提出された報告書は教育実践研究推進本部を通じて附属図書館へ寄贈する。

*腰越 滋，2014,「読書を支える活動や行動とは何か？― 「第58回学校読書調査」分析 data の構造方程式モデリング ―」,『東京学芸大学紀要・総合教育科学系Ⅰ』,第65集，東京学芸大学，19－34頁。

今回の研究成果知見を踏まえ、連続する問題関心から目下のところ「第59回学校読書調査」の分析を行っている。これに関しては2014年度の日本教育社会学会大会において報告の予定である。